

黒毛和種の雌牛肥育における濃厚飼料給与技術

後継牛から除外される黒毛和種の未経産雌牛を、去勢牛と同じ飼料給与方法で肥育すると、枝肉重量が小さく余剰脂肪の多い枝肉が生産されてしまいます。また、経産牛は、肥育されるまで放牧や牧草サイレージ主体で飼養されていたため、肥育せずに出荷すると肉色が濃く、脂肪色の黄色味が強いなどの問題が指摘されています。そこで、未経産牛に適した飼料給与技術について検討するとともに、経産牛の枝肉品質向上のために最適な肥育期間を明らかにしました。

☆ 技術の概要

1. 皮下脂肪や筋間脂肪の増加は肥育開始直後から始まっていることから、余剰脂肪が付きやすい雌牛では特に肥育前期（16ヶ月）までの飼養管理が重要です。
2. 未経産雌牛肥育においては、穀類割合 60%の濃厚飼料を 0.5kg/月で増給する飼養方法では、日増体量や枝肉重量が最も大きく BMS No. も高い。しかし、1.0kg/月で増給（去勢牛肥育における慣行法）する飼養方法では、枝肉重量が小さく BMS No. も低い。

これらのことから、未経産雌牛肥育には穀類割合 60%の濃厚飼料を 0.5kg/月で増給する飼養方法が適しています（写真1）。

3. 経産牛では、肥育することによって脂肪および肉の色沢が改善されますが、6か月以上肥育しても枝肉重量の顕著な増加は期待できません。BMS No. は肥育期間の延長とともに改善されますが、肥育期間を6か月から9か月に延長すると肥育にかかる主要経費（飼料費＋敷料費）が1.5倍に増加します。



写真1 ロース芯（左から 40%-0.5kg 区 40%-1kg 区 60%-0.5kg 区 60%-1kg 区）

☆ 活用面での留意点

未経産牛肥育試験については、約 9.5 か月齢から 28.5 か月齢まで肥育した結果で、肥育後期に起立不能が起こることがあるため、日常の観察に注意が必要です。また、経産牛肥育試験については、体重 450～550kg の一般的な経産牛を肥育した結果です。詳細は、北海道立総合研究機構農業研究本部畜産試験場肉牛グループ杉本昌仁（TEL：0156-64-0609）にお問い合わせください。

（日本政策金融公庫 農林水産事業本部 テクニカルアドバイザー 加茂幹男）